

縦横

西暦 2000 年が 2001 年になったからといってことごとく新世紀だ、21 世紀だといって大騒ぎをするのもどうかと思うが、今年が 1000 年に一度の大世紀のはじまりであり、あの大世紀末の「失われた 10 年」に決別したい願い切であってみればまんざらその気持ちが分からないでもない。

しかし、私達は 20 世紀を倫理的に正しく清算してこなかったのではないかという鬱勃たる悔恨が心にわだかまっているのを正直に告白しなくてはならない。言うまでも無く「従軍慰安婦」問題であり、朝鮮民主主義人民共和国に代表される「戦後処理」問題である。前世紀後半の大半を占めた冷戦をいいことにして、この国の民と政府は、これらの問題に何の解決もしてこなかったのである。にもかかわらず巷には「自由主義史観」といつのつて夜郎自大の「国民の歴史」を声高に叫ぶ者らがいる。そこでは「歴史は物語である」として偏狭なナショナリズムの鼓吹に余念が無い。この主張こそ、1945 年に後悔し、反省し、まして「総懺悔」したのである以上、以後前世紀中に確固として払拭しておくべき主題であったのに、である。

同じ敗戦国でありながらドイツの戦後が徹底したナチズムの清算に費やされたのとは好一对の対称をなす。丸山真男は『日本の思想』（岩波新書 1961 年）で、この国の思想には構造化されない「無構造の伝統」があるとして、「これは特に国家的、政治的危機の場合に著しい。・・・人間がびっくりした時に長く使用しない国訛が急に口から飛び出すような形でしばしば行われる。一秒前まで普通に使っていた言葉とまったく内的な関連なしに、突如として「噴出」するのである。」と述べている。

たしかにバブル経済を謳歌していた 1980 年代、「政治は二流、だが経済は一流」とおだてられていた者が、この 10 年間経済も二流以下であることを存分に見せつけられてみれば、これは紛れもなく「国難」に違いない。こうして「自虐史観」からの決別などという「長く使用しない国訛が急に口から飛び出すような形で」言葉が「突如として「噴出」」してくるのである。

新世紀にあたって、今一度「思い出」としての歴史でなく、歴史を「構造化」する作業が必要であり、その後に新世紀にかける希望を語ることにしても遅くはないのではないだろうか。